



# 住吉神社の文化財における ユニークベニューとしての活用

「ユニークベニュー」は、博物館や美術館、歴史的建造物や庭園など、イベントの会場として地域の特性を演出できる“特別な場所”を活用し、“特別な体験”を創造する取組みです。文化庁によると、海外ではユニークベニューをMICE誘致や都市の差別化を図るツールの一つとして活用が進む一方、日本国内では活用可能な施設数があまり増加していないのが現状です。そこで近年、観光庁では日本らしい情緒を味わえるユニークベニューの開発・利用促進を図っており、福岡市でも、赤煉瓦文化館や旧高宮貝島家住宅・高宮南緑地などで積極的な取組みが進められています。

今回は、福岡市がユニークベニューとしての活用に向けて整備支援を行う施設の一つ「住吉神社(博多区)」について、文化財や整備状況をご紹介します。

※この誌面は、福岡市経済観光文化局文化財活用部および住吉神社提供の資料をもとに当所で作成しています。

## 住吉神社の成り立ち

福岡市の陸の玄関口として賑わう博多駅(博多口)から、西南方向およそ600mに鎮座する住吉神社(博多区)。その歴史は、1,800年以上前にさかのぼります。古書には「日本第一住吉」などと記され、全国2,000社以上ある住吉神社の中で最古の神社とも言われています。

主祭神には、住吉三神(底筒男神(そこつつのおのかみ)、中筒男神(なかつつのおのかみ)、表筒男神(うわつつのおのかみ))が祀られています。住吉三神は、黄泉国(死の世界)に旅立ったイザナミをイザナギが引き戻すため、住吉の地(=「筑紫の日向(ひむか)の橘の小戸の阿波伎原(あはきはら)」)で禊を行った際に瀬で誕生したと奈良時代編さんの「記紀(=古事記と日本書紀の総称)」で記されています。このことから、住吉神社の御利益は、心身の清浄をもってすべての災いから身を護る浄化の神として古くから信仰されています。さらに、住吉三神の「筒(つつ)」には、星の意味があるといわれており、航海・海上の守護神としても信仰されています。実際に、全国の住吉神社のほとんどが当時の海岸線に近い位置にあり、中世の情景を描いたとされる「博多古図」でも、比恵川と那珂川の河口に突き出た冷泉津の岬の上に海の玄関口として鎮座する様子が分かります。

加えて、住吉三神には和歌・文芸の神としての性格もあり、中世以降、多くの歌人たちから信仰を集めてきました。



▲住吉神社の表参道(博多区住吉3丁目1-51)



▲中央上側が住吉神社(住吉神社提供「博多古図」)

## 住吉神社の文化財を知ろう!

国指定・有形文化財(旧国宝)  
(1922年)



住吉神社・本殿



軒を支えるために柱上部に組まれる構造物を使用しない「住吉造」という様式で、直線的な屋根などが特徴。仏教伝来前の日本独自の古代建築を伝えています。現在の本殿は、1623年に福岡藩主・黒田長政によって再建されました。25年ごとに改築・修理する式年遷宮が行われており、直近では2010年に御遷宮が行われました。

市指定・有形文化財  
(2000年)



住吉神社・能楽殿



大正時代に警国の能楽堂が老朽化して演能が困難になったため、新たに建設する計画が興り、1938年に落成。西日本随一の舞台として、能楽関係者から親しまれています。舞台は、全て檜造りで、現存例の少ない木造能楽殿です。音響効果を考えて床下に数個の壘(かめ)が置かれているほか、能楽殿には珍しく、舞台向かって右手には高貴な方が鑑賞するための貴賓席があります。

市指定・有形文化財  
(1987年)

松花和歌集・巻第五



鎌倉時代末期に成立した和歌集「松花和歌集」全10巻のうち第5巻(室町時代初期の写本)。全国でも唯一まとまった形で現存しています。

# 能楽殿をユニークベニューに！

## 活用に向けた取り組み

福岡市では、インバウンド向けに日本文化や伝統芸能の魅力が発信可能であること、建造物本来の歴史的価値が十分でユニークベニューとして活用できる可能性が高いことから、「住吉社能楽殿」の再整備による観光資源の魅力増進が図られています。福岡市の補助によって、市民や観光客が能楽殿を安全に活用できるように、屋根の葺替えや耐震補強、冷暖房の設置やトイレの洋式化など環境整備が行われています。

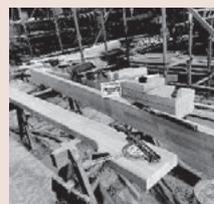
### ＼いよいよ10月に完成／ 文化財・能楽殿の工事過程

- 2018年10月  
雨漏り等によって舞台の使用が制限され、能楽師や市民から早急な整備要望の声があがる。
- 2019年  
ユニークベニューとして、能楽殿の機能拡充と魅力ある新たな歴史資源としての活用が検討される。
- 2020年2月  
能楽殿の保存修理調査を実施。
- 2021年7月  
整備実施に向けた設計を行う。
- 2022年2月  
整備工事着手。
- 2023年10月  
能楽殿竣工(予定)。

### ＼特別潜入レポート／こんな工事やってます！



▲舞台の屋根は、檜皮葺きというヒノキの樹皮を用いた日本古来から伝わる伝統的な手法が用いられています。



▲客席小壁の梁には、虹梁といわれる虹のように上向きに反っているものが用いられています。そのほか、職人さんによってミリ単位で計算して加工され、木組みされています。



当社は、古代から福岡の地の変遷を見守るとともに、現代に伝統文化を伝えてきました。住吉社能楽殿は、特殊な木組みや土壁など、日本古来の技法によって建てられていることにより、日本音楽本来の柔らかな音色が響きます。昭和13年(1938年)の落成以来、多くの能楽師や市民の皆様がこの舞台を踏んでこられました。この能楽殿を日本の伝統芸能の“真”を伝えられる施設として継承し、能楽のみならず、様々な催事やイベントなど、ユニークベニューとしての活用が盛んになることで、福岡の文化を発信する中核的な施設になれば幸いです。

10月15日からは、こけら落としウィーク「めで舞たい」を開催し、能楽公演やコンサートなどを行います。ぜひお越しください。



住吉社 権福宣  
桐田 篤史 氏

当所は歴史・文化を活かしたまちづくりに取り組んでいます！



## ご当地「博多ナンバー」導入推進に関する要望書を 8月25日、福岡市に提出しました！



▲意見交換する中村副市長(左)と川原副会頭(右)

「博多」という名称は、続日本紀(759年)に「博多大津」として登場するほか、中世では「当時、日本で最も栄えている交易拠点都市「Fakata(ファカタ)」として南蛮船の船長により全世界で紹介されました。要望書では、このような1200年以上の歴史を持つ「博多」という地名をご当地ナンバーとして導入することで、郷土愛の醸成や経済振興、市の魅力向上に期待ができると提言されました。

※要望提出に関する報告は、p11に掲載しています。

### そもそもご当地ナンバーってなに？

ご当地ナンバー制度は、地域振興に役立てるため2006年に国交省により導入され、九州では鹿児島県の一部で「奄美」が採用されています。また、2018年からは、地域特有のイラスト入り「地方版図柄入りナンバー」も開始。熊本県では、くまモンのイラストで人気を集めています。

### なぜ「博多市」にならなかった？

福岡市は、商人の町「博多」と黒田氏の城下町「福岡」の2つの町をルーツとしています。1888年、明治時代の廃藩置県で誕生した「福岡県」に市が置かれることが決定し、市名の議論が始まります。しかし、議論は膠着状態に陥り、当時の県令(知事)が特権を行使して名称は「福岡市」に決定。翌1889年4月1日に市制がスタートしました。

1890年2月、市名の議論は再燃。当時の市議会に博多選出の議員から、市名変更に関する議案が提出されます。当時の議員数は、博多部17名、福岡部13名で博多部が優勢かと思われていました。2月14日に行われた採決では、3人(博多部2名、福岡部1名)が欠席となり、結果は13票対13票の同数に(欠席となった博多派議員は、トイレに軟禁されたのではないかという説も…)。2度目の採決でも同じ結果になり、最終的には旧福岡藩の武士であった議長の判断に委ねられました。議長の投票で議案は否決となり、市名は現在まで続く「福岡市」のままとなったのです。

記事に関するお問い合わせ / 企画広報グループ TEL: 092-441-1112  
文化財やイベント情報に関するお問い合わせ / 福岡市文化財活用課 TEL: 092-711-4982